

プルードンにおける信用改革構想の形成

齊 藤 悦 則

問題の所在

プルードン (P.-J. Proudhon 1809-1865) は1848年3月以降、たてつづけに信用改革案・銀行計画を提示している。これらの提言は、はたして「理論的関心よりもむしろ実問題的な問題状況」の所産なのか。⁽¹⁾状況に対応した単なる「戦術」なのか。⁽²⁾

46年10月、『経済的諸矛盾の体系』(以下『体系』と略す)を出版して一週間のち、プルードンは友人あての手紙の中で、「私の純粋な研究の時代は終わった」と言い、「今後私に残されている課題は、私の著作で表明された一般法則の応用を追求すること」だと述べている (Cor. II, 222)。また、彼の追求した経済科学が一連のアソシアシオン構想を通して具体的実践に移されようとしていたことは、43年から書きはじめられた『手帳』の中の諸記述からも読みとれる。したがって、48年来の彼の諸提言は、まず彼の思想的営み、思考の運動の中に位置づけられねばならないのではないか。

たしかに、46年の凶作と鉄道投機熱から47年の恐慌が全面化する中で、「信用の合理的組織の欠如」が普遍的な認識となり⁽³⁾、金融・信用の問題が新聞にぎわせ、さまざまなクラブで激論され、多種多様な信用改革案が提示されていた。⁽⁴⁾プルードンもそうした状況と無縁でありうるはずはなかった。しかし、プルードンの思考に即して彼の具体的提言の意味をとらえようとするならば、それは決して状況即応的な、一時的方策のレベルにとどまっていなかったことに注目すべきであろう。彼は48年3月末の『信用と流通の組織化』の中でこう主張する。「経済の諸問題は……その全体において一挙に解決さるべきもの」であり、部分的な改良の積み重ねなる発想は第一に排除さるべき「偏見」であると (Org. 3)。彼の言う「信用の組織化」は、こうした経済問題の全般的・普遍的解決の方策として提起されている。⁽⁵⁾

経済の普遍的矛盾を普遍的に解決すること。これが46年の『体系』におけるプルードンの基本的で中心的な志向であった。彼のみるところ、経済的諸矛盾は複合的で体系的な系列 série なのである。「系列」概念は43年の著作『人類における秩序の創造』(以下「創造」と略す)以来の彼の重要な方法的主柱の一つであるが、それには次の二つのことが含意される。まず、矛盾の一つの結び目を解く論理は、矛盾の連鎖すべてにおよぶものであること。次に、実践的解決は一瞬のうちに行われるものではなくて、漸進的 progressif な性格をもつものであること。

こうして見ると、『体系』におけるプルードンの最大の課題は現実の矛盾を解くべき論理の模索であり、析出であったと言える。ついに析出された論理が再び現実に戻っていく。これがプルードンの以後の具体的な諸提言の内容を規定する。

したがって、1848年以降の彼の信用改革案とそれ以前の諸著作との連関という視点に立てば、彼の提言は単なる状況の所産以上のもの、一時的で部分的な戦術の域をこえているものではないか、という問いがまずなされねばなるまい。⁽⁶⁾

第2の問題は、プルードンにあってなぜかくも交換・流通が重視されているのか、ということにかかわる。47年3月、プルードンは『手帳』にこう記している。「社会問題はすべて分配・流通・交換の問題であって、それ以外のものではない」(*Carnets* II, 29)。まさしく、プルードンは「交換の諸条件の変革の内に社会革命の全体をみている」のである。⁽⁷⁾これはなぜか。

ここに、プルードンの思想の核心である「相互主義」は等価交換を原理としているからだ、とする解釈がある。⁽⁸⁾つまり、プルードンはもともと平等主義者として交換を重視していたから交換を重視したのだ、と言うのである。⁽⁹⁾こうしたトートロジカルな解釈は、プルードンの相互主義を「平等主義」なる主観的願望からの直線的な帰結とみなすことに由来する。⁽¹⁰⁾しかし、はたして「プルードンのすべての主張は……情念の所産」,⁽¹¹⁾「道徳的要請」⁽¹²⁾の表明にすぎないものなのだろうか。

プルードン自身、「人民銀行は……社会経済学の基礎である相互性の原理の……適用であった」(*Confes.* 256)と述べているように、彼の信用改革論は彼における相互主義の形成・展開の脈絡の中でとらえられねばならない。しかるに、彼が相互主義の形成において企図したものは、個人主義と集団主義、政治経済学と社会主義、所有(*propre*なもの)と共有(*commun*なもの)、社会名目論と社会実在論の総合、のりこえであった。社会は個の集合体、われわれの結びつきの総体でありながら、個々の主観を超えた独自の社会的本能にしたがって運動する。われわれのなすべきことは、この社会に内在する法則・論理を析出して、社会をわれわれのものとしてとらえかえすことである。このように、プルードンの相互主義とは「社会科学」の構築を通して、すなわち必然性の認識を通して自由を獲得しようとする思想的営みの産物であった。したがって、それはむしろ平等主義からの離脱のプロセスの中に位置づけられねばならない。⁽¹³⁾

こうしてみると、私がかかげた二つの問題は一つに帰着する。48年来のプルードンの提言を、彼の思想の内的発展のプロセスの中に位置づける視点を欠けば、状況との対応でしかこれを解釈しえないのは当然である。これを平等主義なる主観的願望に直結することも、やはりプルードンの思想のダイナミズムを見落したことから当然の帰結である。われわれはプルードンの思想をとらえるにあたって、それを平等主義として「読みこむ」ことから始めるべきではない。彼の初期の著作からみられる「絶対的で厳密な社会科学」(*Dimanche*, 89)形成の志向が、やがて交換の論理としての相互主義へと収斂していくありさまを、プルードンに内在して明らかにしていくことが必要である。

われわれがこれから検討しようとしているのは、48年にむけてのプルードンの思想的な営みである。これはすなわち、48年以降のプルードンの提言(信用改革論)を、それまでの彼の諸著作との有機的な連関においてとらえなおすことにつながるであろう。

I. 社会科学の希求

初期の著作『日曜論』(1839年)の中で、プルードンは安息日の制度の意義を論ずる。彼によれば、定期的休日は人々に活力と社会性を回復させるはずのものなのに、同時に放蕩、不毛な享樂を生みだしている (*Dimanche*, 68–69)。こうした原理に反すると見える結果が生じるのは、人間の意志が相異なる二つの衝動に従っているからだ (*ibid.* 89)。一つは独立の欲求としてのエゴイズム、もう一つは他者と相互に存在を支えあおうとする志向としての理性 (40年の用語で言えば、ソシアビリテ) である (*ibid.* 90)。そして、悪弊は必ず前者、すなわち社会を個に分断する論理から生まれる。

プルードンの考えによれば、個々人の結合の総体である社会は個々人の私的意識とは無縁の一法則によって支配されている。人知を超えるものとして人々が「神」と呼んだのは、こうした「生きた力」としての法則なのだ (*ibid.* 87)。社会がつくりだす諸制度は、それが合法則的である限り正しく、それを離れれば悪に転化する (*ibid.* 89–90)。⁽¹⁴⁾したがって、人と人との結びつきについての法則が正しく理解され、応用されれば悪弊は消滅するはずだ。

プルードンは物理学のように「専断を排除し、一切のユートピアを拒否する」(*ibid.* 89) ような科学が社会についても存在すると考えた。「人間関係にかかわり、人間の本性、諸能力にもとづいた絶対的で厳密な社会科学もまた存在するはずだ。その科学は発明すべきものではなく、発見すべきものなのだ」(*ibid.* 傍点はプルードン) と言うのである。⁽¹⁵⁾社会に内在する法則——これは神の摂理なる形で人々によって予感されている——を、自然科学的な厳密さでもって析出し、適用していくことが社会科学の課題である。⁽¹⁶⁾こうしてプルードンはその志向において、すでに単なる平等主義を超えている。⁽¹⁷⁾

1840年『所有とは何か』(以下『所有』と略す)において、プルードンは個の論理の悪弊を集約的に表現するものとしての所有を論じる。彼によれば、所有を成立させた二つの権利 (先占権と労働権) はいづれも自然的、必然的なものである (*I^e Mémoire*, 306 邦訳252)。しかるに、所有は自らを成立させた原理そのものによって否定され、存立不能となる。一般に、現実の諸制度の根本をなにかしら邪悪なものとみなして、それらを断罪するのは正しくない (*ibid.* 142 邦訳52)。現実的なものはすべて必然的で合理的なものであり、諸悪弊はそれを成立させた原理・法則についての無知に由来する (*ibid.* 140 邦訳50)。諸制度は社会を社会として存立させるために必然的につくりだされたものである。人と人とを結びつけ、それらの関係を支配する原理・法則が社会の根底にある。そうした原理・法則性への準拠をプルードンはここで「正義」と名づけたのである (*ibid.* 144 邦訳54)。「法 *droit* とは社会を支配する諸原理の一総体である。人間における正義とはこれらの原理を尊重し、順守することである。正義を実践するとは社会的本能に従うことである」(*ibid.* 300 邦訳245)。

所有もまた、こうした社会原理にもとづく必然的産物であった。したがって、それは原理にか

なう限り正しく、有用であり、それに背いたとき誤り、有害となる。⁽¹⁸⁾「個体的占有は社会生活の条件である。所有の五千年〔の歴史〕がそれを証明している。所有は社会の自殺である。占有は法の内にあり、所有は法に反している」(*ibid.* 345 邦訳299)。

それでは、こうした原理からの離反はどうして生じたのか。この時期のプルードンにあって経済研究の不十分さのゆえに、彼は経済諸事象の自己展開のありさまをダイナミックに把握することができない。説明は前年の著作と同様もっぱらエゴイズムとソシアビリテの対立という心理学的レベルでなされている。⁽¹⁹⁾ここにみられるのは、低いレベルの理性が誤りや悪を生み、理性の向上がそれを訂すという考えである。これは理性信仰にも似たものであり、一種の摂理史観とも言いえるほどのものであった。⁽²⁰⁾所有という狭い問題の枠組みをこえ、批判(否定)から建設(肯定)への重点移動が行われるのは、43年『創造』からであった。

II. 社会科学の形成

今日の社会＝経済的諸制度が生みだしている悪弊の原因を、それらの制度の本来の合理性、必然性とともどもに明らかにし、そこから合法則的で、したがって唯一可能な解決を見出すことは、経済社会の総体的な、つまり体系的な把握なしには不可能である。これが43年におけるプルードンの基本認識であった。

われわれの目の前にある社会は複雑で錯綜したものである。これをとらえるにあたって、われわれはまず分割(分析)を行い、つぎに結合(総合)を行うことが必要だ。分割された諸要素の間に或る関係を見出し、そしてそれを根拠に再び諸要素を結合していけば、ついに社会の総体は整序された体系の姿でわれわれの前にあらわれてくるのではないか。つまり、単純なものから複雑なものへ、その系列的連鎖をたどり上向していくこと、これがプルードンの「系列弁証法」なる方法であった(*Carnets I*, 118)。彼は、人間による観察が明らかにしうるものは物の実体や第一原因ではなく、ただ「ものともものとの諸関係」だけであるとした(*Création*, 34, 40-41, 140)。⁽²¹⁾彼によれば、分割と結合こそが科学を科学たらしめる方法である。とすれば、経済社会をとらえる科学も、それが厳密で確実なものであるには、分割・結合されうるような対象を発見することから出発しなければならない。ところが、これまでの経済学は「富の生産と分配の科学」を自称しながら、富の対象(つまり科学の対象)を土地、農業、工業、商業、貨幣などのあれこれに求めたため、結局、単一で普遍的な原理を見出しえず、現実の錯綜の内に埋没してしまった。経済学の対象をはじめて科学的に決定づけたのはアダム・スミスである。彼は生産の諸形態を労働という単一で普遍的な源泉に集中することによって、誤謬の巢を破壊した。あらゆる経済事象の基底に存する共通項としての労働、これを対象とすることによってのみ、経済学は科学たりうる。

こうしてプルードンは労働をその客体、主体、およびそれらの総合という三つの視点から複合的にとらえようとするのだが、⁽²²⁾ここでわれわれはもっぱら「客体において考察された労働」を見ることによって、43年段階のプルードンの新たな到達点とその限界を明らかにしよう。

プルードンは生産物・価値・資本・賃金を同一性の関係で系列的に整序されるものとする。つ

まり、生産物とは実現された労働であり、「有用な生産物は価値と呼ばれる。蓄積された価値は、再び生産に用いられることによって資本となる」(*ibid.* 312)。そして、賃金は流通の具としての貨幣（それはそれ自体、金や銀という特殊な素材に適用された労働の産物そのものであり、一種の便宜的とりきめによって価値の標準として機能しているにすぎない）(*ibid.* 319-321)を通して表現された労働である。⁽²³⁾

しかるに経済学上の混乱、実践上の誤りは経済社会を一総体とみる視点の欠如に由来する。

人々は生産物を純生産物-粗生産物に区別して土地・資本の生産性なるフィクションをつくりあげたが、社会を一個の集合存在とみるならば、この区別は無効である。また、使用価値-交換価値という価値の二重性も、生産物に対する消費者と生産者の見方の差を表現するものにすぎず、社会を一個の巨大な生産者にして消費者とみるならば、二つの価値は同一のものに帰する。つぎに、資本と賃金に関して。資本が「蓄積された労働」(*ibid.* 312)として生産の増進に寄与する有用なものである限り、資本家とは労働者の別称にすぎないはずだ。かくして、本来的に同一であるはずのものが相異なるカテゴリーに区分されたことこそ、今日の諸悪弊の根本である。その源にあるのは、全体から個が分断され、取得の個人性が労働者本来の社会的結びつきを断ちきる原理となって自立したことである。つまり、経済事象の本来の同一性という原理、すなわち43年段階のブルードンが社会に内在する系列的法則性とみたこの原理が、一つのフィクションによって侵犯されていることに社会問題の全体は由来する、とされたのである。

われわれの眼前にある社会はフィクティブなものである。諸制度は社会法則にのっとって必然的に出現したものであるがゆえに、それら本来の法則性に背くものとなったとき、必然的に消滅するであろう。消滅すべきものに仮の生命を与えているのが社会的フィクションなのである。そうしたフィクションの背後にあって、社会に真の生命を与えているものは何か。それは個が自由な主体であると同時に、他者と相互に存在を支えあい、結びつきあっている関係そのものである。すべての人間が社会的富の生産にかかわりあい、「相互に債権者であり、債務者である。こうしたことが労働者を結合する解きがたい鎖なのだ。……このことが取得の共同性と個人性とを同時に表現する普遍的連帯というもののなのである」(*ibid.* 318)。

ブルードンはフィクティブな社会と対置される「現実の社会」の必然的な自己表出を展望する。しかし、この時期において、こうした見解は彼の意図に反して、「あるべき社会像」の提示の域をこえていない。それは、運動するものとしての社会の動態的分析が不十分であることに起因していると言えよう。あえて言うなら、彼のこの時期の「系列理論」は、調和的で静止的な均衡にいたった理想社会の描出にとどまる。⁽²⁴⁾それは同一性を原理とする限り避けられなかった。社会のダイナミックな実像をとらえるためには、対立・矛盾の弁証法が用意されねばならない。それは集合力理論の高次化を通して、1846年『体系』において、ようやく意識的に追求されることになる。そこでは同一性の原理にかわって、アンチノミーの原理、そしてアンチノミーの動的均衡が社会考察の主軸となる。⁽²⁵⁾

III. アンチノミーの理論と価値論

46年『体系』でプルードンは経済社会の自己運動を必然性の系列においてとらえようと企てる。社会の運動を法則的に把握することによって、人類は宿命への拝跪から全き自由の世界へ移れる、というのである。彼に言わせれば、必然性を想定することは何ら新奇な創意ではない。これまで人々が神の摂理としてきたものが実はそれなのであった。⁽²⁶⁾そこでプルードンもこれにならって、寓意的に「一つの神 un Dieu」を想定する。人間の集合存在である社会が個々の意思とは無縁の、一個の独自の意思（集合理性）をもち、活動するさまを描きだすことが、彼の「社会科学」の目的であった。⁽²⁷⁾

これまでの経済学は既存の事実、ルーティンの確認にとどまって、未来を展望しえず、結局エゴイズムの公認に帰着した。一方、社会主義は現実的なものの合理性をみずに、現状批判にとどまったため、現実的根拠をもたないユートピアの空疎な提示にいきついた。それに対して、「社会科学は……諸現象の連鎖を示し、その連鎖と統一を発見する。このようなものが生きた、漸進的な現実全体の科学でなければならない」(Sys. I, 73)。社会の運動の法則性（必然性）を認識することによって、われわれはわれわれがなしうることを、そしてわれわれの責任においてなすべきことを示しうる、と言うのである (ibid. I, 85)。この科学のよるべき方法は系列弁証法である (Carnets I, 118)。しかし、ここで示される系列は、もはや『創造』段階のような同一性の系列ではなく、アンチノミーの系列である。動くものをとらえるための方法はアンチノミーの弁証法でなければならない。

ここで系列理論はアンチノミーの理論（あるいは均衡の理論）となり、集合力理論と並んで重要な基礎的方法となる。それは『体系』第二章「価値について」で展開される。

経済学者たちによれば、使用価値と交換価値は互いが互いを必要としながら反比例の関係にある。こうした価値のイデーの対立・矛盾は一体なぜなのか、とプルードンは問う (Sys. I, 95)。生産物が価値について二重のイデーをもつのは、それが生産者（供給）の側と消費者（需要）の側から二様に眺められるからである。自由な買い手である消費者は自分がそれに支払いたい価格の自由な判定者であり、一方、生産者は生産物の価値をその実現に要した費用・労苦にもとづいて数値的に表現しようとする (ibid. I, 97)。価値の二重性・アンチノミー、あるいはその数値的表現としての価格の振動は、生産者と消費者をきりはなす視点、社会を個体の単なる集合とみる視点からの論理必然的な、したがって現実的な帰結である。経済学者たちが、需給のみが価値の法則だとしたのも、個が分断された現実の正確な反映であり、その限りで根拠があった (ibid. I, 103)。しかるに、社会を一個の巨大な人間（集合的人間）としてみるならば、彼は生産者にして消費者なのである。社会の総体において、生産と消費は同一なのだ (Carnets II, 27)。そして、彼の労働が必然的にもたらす「生産物の超過は翌日にまわされ」、つまり資本となって更なる生産の増大と、したがって消費の増大につながる (Sys. I, 126)。価値の矛盾・アンチノミーは全体的視点において解決の糸口を見出す。

ブルードンは、彼が経済科学構築の「礎石」(*ibid.* I. 90)にたとえた価値論の中で、生産と消費の対立を基本的アンチノミーとしてとらえた。しかし、アンチノミーはそれ自体、解決の「約束」、「したがって変革の予告」である(*ibid.* I, 101)。解決のヒントは経済学者たちの無意識の実践の内にある。彼らは毎年、数々の統計表から、すべての生産物の市場価格の平均値を求めている。それが意味するものは何か。社会において、一方のもうけは他方の損に等しいのだから、価格の振動は結局、正当にも「生産物の現実的、合法的価値」にいきつく。平均が意味するものはこれである。これは今のところ事後的に求められているが、「それを前もって発見することはできないだろうか」(*ibid.* I, 104)。

社会を集合的人間としてみれば、彼は自分の生産物で自分の生産物を買っている。相異なる、したがって共約不能に見える生産物が相互に較量されるのは、それが労働の客体化だからだ。つまり、生産物を共約するのは労働であり、比較の尺度は労働日である(*ibid.* I, 118)。そして、「全体としてみれば、労働日は労働日によって多くも少なくもなく支払われている」(*ibid.* I, 130)。現実において、価格が一連の振動を経て、ある値に収斂しようとするのも、その背後に社会的本能、集合理性が働いているからなのだ(*ibid.* I, 133)。だとすれば、一生産物の実現に要する平均的労働日が予測的に推計されれば、われわれはA・スミスが「自然価格」と呼んだものをあらかじめ得ることができよう。つまり、一国規模の経済統計、経済計算によって価格を設定する——これが、彼のいわゆる「価値の制定 constitution」なのである。⁽²⁸⁾

価値の制定は部分的にであれ、すでに実現している。金属貨幣がそれだ。金・銀は他の商品に先がけて価値が固定された、つまり、その実現に費されたかくかくの労働日はかくかくの価値をもつと言う比例関係が不動のものとして制度的に確立された最初の、そして今のところ唯一の商品なのだ。それが度量標準、また交換の媒体として役立つのもこの固定性による(*ibid.* I, 118)。共産主義者のように「金を呪うのはむなしい」(*ibid.* I, 122)。問題なのは、この固定性を他の商品においても実現することなのだ。⁽²⁹⁾「会計の高次化、社会の帳簿の整備」(*Confes.* 180)によってそれは可能となる。つまり、それは厳密な計算の問題であって、すこしもユートピックなものではない、とブルードンは考えた。

生産と消費のアンチノミーは個の視点に立つ限り、解決不能である。社会を巨視的にとらえ、運動の法則性、必然性を明らかにすることによって、われわれはアンチノミーの均衡が社会に内在する傾向であることを知るであろう。個の論理に立ったフィクティブな体制が、こうした均衡の自己実現を妨げているのだ。変革は暴力を要しない。⁽³⁰⁾経済構造の礎石としての価値において均衡が確立されるならば、あとは系列的連鎖をたどって漸進的に解決は実現する。⁽³¹⁾なぜなら、以下にみる通り、経済的諸矛盾は系列的に連鎖しあっているからである。

I V・アンチノミーの体系的系列

経済の諸局面は相互に「孤立し、脈絡がなく、無政府的」(*Sys.* II, 395)なものにみえる。ブルードンは社会を一個の集合存在とみなして、その経済的営みの諸カテゴリーを系列的高次化と

して位置づけ、経済メカニズムの体系的解明を試みる。社会は「集合的生産者」(*ibid.* I, 147)として、たえず自己の生産能力を向上させようとするが、そうした営みはどのような展開をみせるであろうか。以下、プルドンの挙げた10の経済的エポックを大まかにたどってみよう。

① **労働の分割(分業)**——分業は富の増大、労働者の知的進歩をもたらす第一の道具である。しかし、分業は同時に労働者を分断し、愚鈍化し、富の不平等を生む(*ibid.* I, 138, 139)。

② **機械(制)**⁽³²⁾——これは分業のアンチテーゼとしてあらわれる。つまり、機械は多数の細分労働の集約であり、労働者の自由の復興、福祉の増大をもたらす。しかし、それは同時に労働者を生産からはじきだし、彼らに貧困と隷従をもたらす(*ibid.* I, 179, 191)。

③ **競争**——機械制が生みだした人間の隷従を克服するものとして、また分業の高次化として競争があらわれる。競争は自由の実現、飛躍のバネ、価値制定の必要条件である。しかしそれは同時に生産の無政府性と不安定を生む(*ibid.* I, 248)。

④ **独占**——独占は競争の不断の自己否定の帰結である。独占とは個の安定的自立の保証であり、資本の形成である。しかし、それは反社会的なもの、専制的なものとなる(*ibid.* I, 259, 273)。

⑤ **租税**——独占に対するリアクションとして租税、あるいは経済調整者としての国家があらわれる。それは富の社会的アンバランスを調整する。しかし、税の平等、つまり定率課税は貧者への打撃であり、おそろべき不平等につながる(*ibid.* I, 295, 296)。

⑥ **貿易**——貿易(経済活動の国外膨張)は販売の拡大によって一国の富を増大させ、租税の補完をめざす。しかし、それは安価な生産物の流入をもたらし、国内産業を破滅に導く(*ibid.* II, 5, 67)。

⑦ **信用**——信用は国内における販路の拡充をめざす。信用はすべての価値を流通可能なものとし、国内経済を活性化し、全体として富の増大につながる。ところが、それは利子を介在させることによって、資本の生産性なるフィクションを生む。不労取得が生じ、投機が横行する(*ibid.* II, 118, 133, 134)。

⑧ **所有**——所有は信用が喪失させた労働意欲を回復させるものである。人間は自然・素材に対する働きかけを通して自己を表出する。所有は信用がきりはなした人と自然を再び生き生きと結びつけるものである。独占においては一時的なものであったこの結合を、所有が安定させる。しかるに、独占の高次化である所有は、独占の弊害を更に激化させる。つまり、所有は最も反社会的なものになる(*ibid.* II, 191, 192, 195, 213)。

⑨ **共有**——社会性を回復させるのが共有である。それはエゴイズムの排除、誠実な共感と連帯であり、社会の集合力の自覚的な実現である。しかし、共有は全体への個の埋没、従属であり、個人責任の理念を消滅させて、労働意欲を失わせ、生産力を低下させる(*ibid.* II, 259, 301および *Carnets* I, 195)。⁽³³⁾

⑩ **人口**——人口は一つの巨大な生産力である。人口の増大は国富の増大の根本である。しか

し、人口は同時に巨大な消費力である。人口の増大は生産された物資と対立する。つまり、人類はその生殖能力そのものによって減じる傾向をもつ (Sys. II, 318, 345)。⁽³⁴⁾

以上、プルードンが分業から人口にいたるすべての経済カテゴリー (彼の用語で言えば「経済力」)の中に見たものは、現実的なものの必然性であった。つまり、現実の諸制度はすべて、その生成において必然的であり、合法的なものである。合理的だからこそ現実的となったのである。それらはいずれもそれ自体として否定さるべきものではない。それらが生みだす悪弊も必然なのであり、それは便益に対する費用とみなさるべきものである。⁽³⁵⁾諸制度の生みだす利・不利、便益・費用は、帳簿の貸方・借方と同様、不可分のものなのだ。一方を残して他方を除去すること——マルクスはプルードンをこう解釈したのであるが⁽³⁶⁾——それは制度それ自体の破壊であって、虚妄である。プルードンは彼が手に入れたマルクスの著作『哲学の貧困』のその個所に、「厚かましい中傷だ」と書きこんでいる。⁽³⁷⁾

『体系』を執筆していた時期、彼は『手帳』にこう記している。「矛盾からの出口を探すまい。出口などないのだ。矛盾とともに、矛盾を通してうまくやっ払いこう *arrangeons - nous*」 (*Carnets* I, 133, 45年夏頃)。アンチノミーの原理に従うなら、矛盾を克服しようとする、より高次の制度も必ずそれ自体アンチノミーをはらむ。めざすべきは悪無限の矛盾の内に入りこむことではなく、まさしくアンチノミーの均衡にあるのである。

プルードンの言う「正義」とは、したがって現実の悪弊に対置されたものではない。諸制度が生みだす善も悪もともどもに必然事としてとらえ⁽³⁸⁾、そのアンチノミーの均衡を社会内在的な、法則的傾向とし、その法則に準拠するか否かが正と不正を分けるものだ、と言うのである。⁽³⁹⁾法則の客体性、人間によるその実現の主体性があるからこそ、正義は「客体的であると同時に主体的」なものだとされたのである (Sys. I, 111 および *Carnets* II, 288)。そして、自由とは宿命に反対することではない。自由とは宿命を自己の責任においてまっとうすることなのだ、とプルードンは述べている (Sys. I, 387)。

さて、最終項「人口」にもう一度目をむけよう。そのアンチノミーは生産と消費という視点の対立にある。これはプルードンが経済の礎石とみなした価値のアンチノミーに直結する。つまり、彼の「体系」は明らかに生産と消費の対立を結節点とする円環的構造をなしているのである。「人口」の章の中でプルードン自身、こう述べている。「いったん共有まで達すれば、社会は再びその出発点にもどる。⁽⁴⁰⁾……均衡はまだ[どの項においても]達成されていないので、残された望みはただ一つ、インテグラルな解決のうちにのみある」 (*ibid.* II, 322)。かくして、価値のアンチノミーの均衡が全般的解決の鍵とされるにいたったのである。

V・交換への収斂

「アンチノミーの普遍的解決」 (*Carnets*. I, 267), とプルードンは言う。しかし、それは諸矛盾を爆発的に終焉させよう、というものではない。47年末の『手帳』の記述を借りれば、「鎖の

最初の環」(*ibid.* II, 318)が普遍的に承認されれば、まずは十分なのだ。解決は文字通り系列的に、すなわち漸進的に行われるであろう(*ibid.* II, 264)。

それでは「最初の環」とは何か。これまでみてきたことから明らかなように、それは生産と消費のアンチノミーの均衡である。巨視的にみれば、この均衡は社会の法則である。個の論理がこの法則を侵犯しているのだ。必要なのは、社会に内在する法則を正しく適用することなのである。つまり、「集合的人間において真なることを、個としての人間において真なるものにする」

(*ibid.* I, 95 45年4月)ことが必要である。それは生産物が生産物で買われる現物交換の論理を再生することだ、と言う。46年半ばの『手帳』にプルードンはこう記す。「結論——われわれは *mutuum* [隣人との貸借] に、……現物交換に、交易の最古の形態に回帰しよう」(*ibid.* I, 257)。このように、彼の相互主義 *mutuellisme*、相互性 *mutualité* の理論は、解決すべき「最初の環」の発見から導きだされたものなのである。

「現物交換に回帰しよう」と言っても、それは物々交換を太古そのままに再現することではない。プルードンの狙いは、会計学を高次化して、生産と消費、供給と需要(社会的欲望)のあらゆる情報を集約して、予測計算を行い、価値を制度的に固定することによって、現物交換の理念を今日的に再生することであった(*ibid.* I, 214)。

交換から流通と信用が派生する。流通とは交換の連鎖、価値の移転運動(*Confes.* 196)であり、「社会における生産と消費の総合」(*Carnets* I, 386)である。また、信用は個と個の関係で言えば貸借であるが、観点を高次化させ、社会関係総体からすれば、それは交換にほかならない(*Confes.* 196 および *Progrès*, 77)。信用の組織化は流通を活発化させ、社会の富と福祉の増大をもたらす。こうして、交換＝流通＝信用の組織化が社会変革の中心的な実践課題として浮かびあがってくるのである。

プルードンにおける社会変革の実践プランは43年来の『手帳』の中に読むことができる。彼は他の社会主義者・共産主義者のアソシアション構想に対して、45年4月以来、独自に *Société progressive*, *Association progressive*, *Mutualité*, *Association mutuelliste* と名づけたアソシアション構想を立てる。そして、それはしだいにはっきりと交換の組織化に結びつけられていく。生産者＝消費者としての各人が社会法則としての等労働交換を実現することは、価値の制定によって可能となる。彼においてアソシアションは、こうした価値の制定のための機関として構想される。その中心業務は帳簿づけ、会計である(*Carnets* I, 83, 90)。45年4月に彼はこう記す。「その実際のな型、あるいは姿は、割引銀行である」(*ibid.* I, 92)。46年6月の記述によれば、それは「買いと売り、譲渡、流通などを操作する」(*ibid.* I, 269)。

こうして、彼は社会的簿記および経済コントロールの装置として銀行をとらえ、彼のアソシアション構想は48年以降、交換銀行あるいは人民銀行として具体化されていくのである。経済構造の礎石である価値において均衡を確立する原理は他のすべてのアンチノミーを解決する原理であることから⁽⁴¹⁾、人民銀行は「普遍的矛盾の普遍的均衡」をもたらすはずのものとして構想されている。まさしく、人民銀行は彼の「科学的社会主义」(*I^e Mémoire*, 339, 邦訳291)の要をなして

いたのである (*Justice II*, 131)。

〔注〕

- (1) 阪上孝『フランス社会主義』, 新評論, 1981年, 204ページ。阪上氏はしかし, 同じ著作の序文でこう述べる。社会主義諸派の改革案は社会全体の変革をめざすものであったから, 「多かれ少なかれ理論的思考の産物」(同, 9ページ)であると。つまり, 彼の著作には二様の解釈が混在する。
- (2) 佐藤茂行「プルードンの交換銀行論」『経済研究』28巻4号(1977年10月), 327ページ。
- (3) 中木康夫『フランス政治史』(上), 未来社, 1975年, 92ページ。
- (4) Aucuy, M. "Les systèmes socialistes d'échange", Paris, 1907, p. 131.
- (5) 阪上氏はこのことに注目しながらも, それはプルードンが「状況を過度に絶対化し」ていることによる発言である, として, プルードンがこれに与えた普遍的性格を単なる思いこみのレベルにおとめている(阪上, 前掲書, 204ページ)。
- (6) 佐藤氏は, 交換銀行は「永遠に役立つだろう」というプルードンの言葉を引用しながらも, 逆に, 「それはこの計画のもつ戦術的役割を否定する主張ではないであろう」とする(佐藤, 前掲論文, 326ページ)。
- (7) Aucuy, *op. cit.* p. 133. また, 津島氏は, 「社会問題の解決を生産のなかにではなく, 流通のなかに求める見解は小ブルジョアの立場に由来する必然的な見地なのである」(津島陽子『マルクスとプルードン』青木書店, 1979年, 211ページ)としているが, しかし, 彼女のプルードン批判はプルードンがマルクス主義者でなかったことを根拠とするに等しい。
- (8) 佐藤茂行『プルードン研究』, 木鐸社, 1975年, 5-6ページ。および, 阪上, 前掲書, 20-21ページ。
- (9) 「相互性が交換=流通にかかわる原理である以上, 経済革命は流通と……信用を課題とすべきものである」(阪上, 前掲書, 150ページ)。
- (10) 佐藤氏は, プルードンを生涯通じた平等主義者として位置づけ(佐藤, 前掲書, 9ページ), プルードンの著作のいずれにも「交換における平等」の主張が見られる, とする(同, 10-21ページ)。そうして, 彼はプルードンの思想全体を平等主義なる倫理的要請から出発したものとみなす。プルードンの言う「正義」を通俗的な意味あいのままにとらえて, 結局, プルードンの経済科学は「明らかに……演繹的・規範的な性格をもった」(同, 22ページ)ものだ, と断言するのである。
- (11) 同, 27ページ。
- (12) 同, 57ページ。
- (13) 阪上氏はプルードンの相互主義を主観的願望以上のものとして位置づけることによって佐藤氏と異なる。佐藤氏はプルードンを倫理主義者とみなすことによって, プルードンの改革案がサン・シモン主義者やフーリエ主義者のそれと「おどろくほど一致していた」ことを結論とした(佐藤, 「フランス初期社会主義と信用改革」『経済学研究』(北大), 28巻1号(1978年3月), 227ページ)のに対して, 阪上氏はプルードンの主張が当時の社会主義者に一般的であった宗教的, 道徳的性格と一線を画するものであった, と述べる(阪上, 前掲書, 146ページ)。ところが, プルードンにおける相互主義の形成については, 阪上氏は佐藤氏の見解を踏襲している。つまり, 相互主義を, プルードンがはじめてその用語を用いた46年の著作『体系』の論理構造において位置づけるのではなく, 40年の著作『所有』にみられる「平等主義」(正しくは, スミス分業論の「平等主義的読みこみ」なる佐藤氏の見解)に安易につなげている(同, 21ページ)。
- (14) プルードンは, いずれの制度についても制度それ自体を悪とみなすことはできない, という立場に立つ。彼は王制を例にとりながら, こう述べている。われわれが王制を廃棄しようとするのは, それが邪まなものであるからではない。また, 憎悪とか復讐心をもってそうするのでもない。それが合法的なものでないからそうするのだ, と(*Dimanche*, 93)。
- (15) 「秩序と幸福のすべての要素は……現に存在している。今, 問題なのはそれらの総合, それらの適用, 発展の方法を知ることだけなのだ」(*ibid.* 96)。

- (16) 『日曜論』中の次の一文は翌年の著作『所有』にそのまま移しこまれていることに注目すべきである。「正義と合法則性は数学的原理と同じ位われわれの同意から独立した二つのものである。それが余儀なきものとなるためには、それがそうと知られるだけで十分だし、そうと知られるためには黙考と研究だけで足りる」(ibid. 45, および I^e Mémoire, 340, 邦訳292ページ)。
- (17) もちろん、平等主義はプルードンの内に色濃く存在する。しかし、43年『創造』において、プルードンは平等主義者の論法を批判しながら、こう自己批判している。「私自身、かつて日曜に関する小論の中で、こうした論法を用いていた。ある期間、私は系列法則を知らなかったので、世間一般に通用しているやり方で推論したのである。しかし、私は所有に関する……三つの覚え書の中で、こうした証明を放棄した」(Création, 181, en note)。
- (18) プルードンにおける所有概念の両義性が多くの誤解をまねいている。わが国において、彼の所有論の「変質」を言う論者は、『19世紀における革命の一般理念』(1851年)の次の一文を論拠とする(河野健二『プルードン研究』, 岩波, 1974年, 18ページ。および、阪上, 前掲書, 199ページ)。「J'ai fait violence aux convictions, je n'ai rien obtenu sur les consciences.」(Idée, 271)。これらの論者は三一書房版の訳:「私は自分の信念をまげたが、この点について私はいささかも後ろめたさを感じていない」(陸井二郎・本田烈訳『プルードン I』, 223ページ)を用いている。しかし、これはむしろ次のように解すべきではないか。「私は〔所有に関して〕人々の信条をゆさぶったが、彼らの意識〔のレベル〕においては求めたものをいささかも得なかった」と。
- (19) 『所有』の段階でのプルードンの説明は次のようなものである。「人間は本来ソシアブルである」(I^e Mémoire, 321. 邦訳, 270ページ)。ところが同時に人間は独立を好む。この相異なる欲求を同時に充足しがたいことが悪の源である。人間における公正の志向はそのソシアビリテに由来するのだが、人間の知能はそうした本能としてのソシアビリテを否定する。それはソシアビリテの最初の様式が共有制だからだ。「共有〔制〕すなわち単純な様式のアソシアシオンはソシアビリテの必然的な目的、初源的な跳躍であり、……自然発生的な運動である」(ibid. 324. 邦訳, 274ページ)。しかし、共有(制)は個を無視することによって、「人間の意志に課せられた鉄鎖」となり、それがもたらすのは「愚劣な画一性」でしかない(ibid. 325. 邦訳275ページ)。こうして所有がアンチテーゼとして必然的に生まれた。しかし、独立の志向から生まれ、その限りで原理的に正しかった所有も、ソシアビリテの一義的反撥であることから、人々の社会的紐帯を切断し、エゴイズムに帰着する。所有と共有はともに善を欲しながら、互いに排除しあっているがゆえに悪を生むのだ。われわれがなすべきことは、独立の要素を保持しながらソシアビリテを実現することである。つまりは、所有と共有の「総合」を見出すことである。「自由なアソシアシオン」こそ、社会の原理に忠実であるがゆえに、「唯一可能であり、正当であり、真実である社会の形態なのだ」(ibid. 346. 邦訳, 300ページ)。これが40年の著作におけるプルードンの結論なのであるが、その具体的内容は少しも明らかにされていない。彼の関心はまだ具体的実践にはない。それは「他の人にまかせよう」と言っている(ibid. 134. 邦訳, 42-43ページ)。
- (20) 1841年7月18日付、Bergmann あての手紙。「本当に社会科学は無限である。なぜなら、それはこの世の諸現象における摂理の秘密の開示だからである」(Cor. I, 343)。
- (21) 『創造』の第3章「形而上学」で展開されているプルードンの科学方法論、「系列理論」の概要は次のようなものである。
- われわれが観察を下向していくと、その最基底に、人為的加工がなされる以前の素材的世界が存在している。そこでの諸事物はそれぞれの本性、特性にもとづいて関連しあっている。いわば、そこには自然科学的法則性で貫かれた世界(秩序)が存在している。これをまずプルードンは「自然的系列」と名づけた(Création, 176)。
- 人間はそれらの素材を有用性あるいは芸術性の立場から加工する。自然的系列のこうした「置き換え」によって新たに作りだされる系列が「人為的系列」である(ibid. 176, 178)。
- 観察の対象は事物相互間の系列にとどまらない。人は系列と系列との間に系列を見ようとする。つまり、

系列の系列化がはじまる。その最も素朴なものが「類似的系列」(アナロジー)である。それは諸系列相互間にある「なにかしら共通したもの」の知覚によってえられる、より高次の系列である。「人為的といえども最も人為的な」この「類似的系列」は、しかし、偶然的類似をも同一性に還元しかねないものとして位置づけられねばならない (*ibid.* 178-182)。

同一性が正しく確認されるのは、その次の「論理的系列」においてである。諸事象の「一般化」「抽象化」によってえられるこの系列は、諸現象を一つの「記号」に写しとり、要約するものである。それはわれわれに枚挙の労を省かせ、そして「全く異なる系列に属する諸事物を合計し、総合する *totalise* 一方法」なのである (*ibid.* 182-185)。

次には、この論理的系列(言語的表象)を単位とする、より高次の系列「弁証法的系列」がでてくる。それは、最もかけはなれたものとして見える諸観念、全く矛盾しあった諸項を、ある「単一の視点」にもとづいて集合させ、同一性の関係の下に結合させるものである。つまり、彼のいう「弁証法」は、現象的に非和解的で異質の諸事物の間に同一性の関係を見出す方法を指している (*ibid.* 193-200)。

そして、系列の進化は最後に、この弁証的系列を単位とする「体系的系列」となって完結する。そこでは視点が多元化され、系列が複合化されて、さまざまな項が全体として一つのタブロー、つまり巨大な体系を形成するにいたる。この段階にいたってはじめて、われわれは複雑で錯綜した現実を総体としてとらえることができるのである (*ibid.* 200-205)。

- (22) Bancal はこれら三部門をそれぞれ「経済計算論」「経済社会学」「経済法」としてアクチュアルに再生しようとする。しかし、彼の著作は興味深い分析、見解を含みながらも、プルードンなどのテキストの恣意的とも思える書きかえ、前後の入れかえなど看過しえない問題をはらむ。(Bancal, J. "*Proudhon, pluralisme et autogestion*", Paris, 1970, 2 tomes, 藤田勝次郎訳、『プルードン 多元主義と自主管理』。未来社, 1982年, (上)のみ)

- (23) 『創造』においてプルードンは、賃金について更に次のように述べている。

賃金を確定するとは労働を測定することに他ならないが、平等主義者のようにその尺度を時間に求めるのは誤っている。それは労働者の個性、産業のちがいを捨象する「一つの恣意的」「人為的」「政治的」な尺度であり、プロクルステスの寝台にすぎない (*Création*, 323-324)。プルードンが、組織の科学(経済科学の第二の部門)で明らかにするように、諸機能は全産業活動をおしなべて総体の内においてみるならば、互いに等価である。しかし、人間を個としてみるならば、同一職種における個々の機能は十全であったり、不完全であったりする。そして、プルードンによれば、個々の機能は要請される機能を1としてそれぞれ分数の形で数値的にあらわされうる (*ibid.* 323, 345, 347-348)。つまり、賃金の平等は即自的に主張できないのであって、この問題を明らかにするためには、全体と個を交互にみわたす眼が必要なのである。

このように、43年段階においてプルードンは、『所有』段階の自らの平等主義的主張から脱却している。

- (24) 私の見解とは逆に、Bancal は系列理論を動態論に、集合理論を静態論に結びつけている (Bancal, *op. cit.*, p. 106, 邦訳, 109-110ページ)。
- (25) 同一性の概念からアンチノミーの概念への移行は『手帳』の1843年後半以降の諸記述から読みとれる。たとえば、43年末の記述: 「自然全体は永続的な創造の内にある一つの巨大なハーモニーだが、その諸部分は継起的に生まれるものであり、相互調和へ到る前に相互に闘争する」 (*Carnets* I, 39)。更に言えば、もともと同一性の概念と結びついていた「系列」なる用語それ自体が「アンチノミー」なる用語といれかわり、しだいに使用頻度が減り、そして「同一(性)」という用語も「均衡」「バランス」という用語にとってかわられていく。
- (26) 「人類は……必然性にしがっている……。いわゆる摂理として信じこまされてきたものは、つまるところ、この必然性そのものなのだ」 (*Sys.* I, 385)。
- (27) 「神は集合的本能、あるいは普遍的理性に他ならない」 (*ibid.* I, 36)。「普遍的理性とは昔の人々が神と呼んだものを今日の用語でいいかえたもの」 (*ibid.* I, 37)。
- (28) Cf. *Capacité*, 155 邦訳166ページ。

- (29) 「貴金属、通貨、銀行券それ自体は善の原因でも悪の原因でもない」(Sys. II, 298)。「カネの君臨は価値の民主制への過渡的状态であり、正義と友愛の基盤である」(*ibid.* II, 299)。
- (30) 「革命ぬきのみならず、改良ぬきの改良。私はただ、諸君が今やっていることをやりなさい、と教えてあげただけ」(*Carnets* I, 261. 1846年6月の記述)。「私の望みは平和な革命だ」(*Idée*. 240, 邦訳185ページ)。
- (31) 『手帳』1847年12月の記述：「価値の改革以外に改革なし。……〔それさえなされれば〕独占を放任せよ、競争を放任せよ。信用、警察、機械も放任せよ。人口はふえるにまかせよ」(*Carnets* III, 315-316)。
- (32) 同じく48年1月の記述：「この〔章の〕タイトル〔「機械」〕を「組織」にかえること。……組織は機械、アトリエ、資本などを含む」(*ibid.* I. 354)。
- (33) 同じく44年末の記述：「共有は……アソシアシオンへの一準備である」(*ibid.* I. 63)。また、45年夏の記述：「共有とは、所有、信用、競争、分業と同様、社会機構の単なる一つのバネにすぎない」(*ibid.* I. 134)。
- (34) Cf. *Justice* II, 111.
- (35) Cf. *Confes.* 180.
- (36) 「プルードン氏にとっては、あらゆる経済カテゴリーは二つの面、良い面と悪い面とをもっている。……解決すべき問題は、悪い面を除去して良い面を保存することである」(マルクス『哲学の貧困』, 邦訳, 全集4巻, 135ページ)。
- (37) Haubtmann, P. "*Proudhon, Marx et la pensée allemande*", Grenoble, 1981, p. 234.
- (38) 必然性の化体として仮設された「神」は、したがって、善なるものと同時に悪なのである (Sys. I. 384)。
- (39) 「それ〔正義〕は〔経済事実の〕アンチノミックな真の本性を確認するにとどまる」(*Justice* II. 149)。
- (40) 佐藤氏は、「このような片言隻語だけからすれば、プルードンの体系が「円環的構造」をもっているかのよううけとられよう。だが、プルードンの体系はすでにみた分類体系という構造からして実際にはけっして閉じてはいなかったのである」(佐藤『プルードン研究』, 161ページ)という。彼の言う「分類体系」とは、Chen Kui-Siの言う類-種概念に負っている (Chen Kui-Si "*La dialectique dans l'œuvre de Proudhon*" (thèse), Paris, 1919)。したがって、体系は階段状の発展として描きだされ、プルードン自身の言葉とは逆に、「出発点にもどる」ことはない、とされる。
- (41) 「第一の問題、つまり交換と流通の問題が解決されれば、他のすべての問題も解決されていく」(*Idée*, 245, 邦訳190ページ)。

本稿で引用したプルードンの著作は、次の略号にしたがって表記されている。引用ページは、*印以外はすべて Rivière 版による。(邦訳のあるものについては三一書房版による。ただし、訳文はこれによらない)。

Dimanche ; De l'utilité de la Célébration du dimanche. 1839.

I^e Mémoire ; Qu'est-ce que la propriété. 1840.

Création ; De la Création de l'ordre dans l'Humanité, ou principe d'organisation politique. 1843.

Sys. ; Système des contradictions économiques, ou Philosophie de la misère. 2 vol. 1846.

* *Org. ; Organisation du crédit et de la circulation.* 1848. (3^eéd. 1849. chez Garnier frères.)

Confes. ; Les confessions d'un révolutionnaire, pour servir à l'histoire de la Révolution de février. 1849.

Idée ; Idée générale de la Révolution au XIX^e siècle. 1851.

Progrès ; Philosophie du progrès. Programme. 1853.

Justice ; De la Justice dans la Révolution et dans l'Eglise. 4 vol. 1858.

Capacité ; De la capacité politique des classes ouvrières. 1865.

* *Cor. ; Correspondance de P. - J. Proudhon.* 14 vol. (éd. Lacroix. 1874-1875).

Carnets ; Carnets de P. - J. Proudhon. 4 vol. 1960-.

〔付記〕

本稿は、経済学史学会第46回全国大会（於東洋大学，1982年11月6日）での私の報告にもとづいている。